Ａ君の学級を担任するようになって、Ａ君が疎外され、孤立していることには、すぐに気がつきました。
お母さんが相談に見えられたのは、今の現状をどうしたものかと考えていた矢先でした。お母さんは大変な落ち込みようで、それまでずっと悩んでいたのでした。お母さんの話を聞いていくと、いろいろなことがわかり、力になってあげなくてはと思いました。Ａ君がLD、注意欠陥多動障害と診断されていることもそのとき知りました。Ａ君のいわゆる問題行動については、見方を変えていかなければならないと思いました。
Ａ君の行動を観察していると、Ａ君は、意識しなくても一人になってしまうことがわかりました。一人残されてしまうのです。休み時間、外に遊びに行くときも、だれも声をかけることはありません。教室移動の時にも、生来の不器用さからか、最後になったり忘れ物があって戻ったりしています。そして、Ａ君が一人になっていることをだれも気にとめていないのです。
Ａ君は小さいころからいたずらが多く、また、忘れ物をしたり身だしなみが悪かったりして、女の子からは特に嫌われるようになっていました。それでも、Ａ君は、そばを通るときにわざとぶつかるようなしぐさを繰り返していました。男の子ともうまくかかわることができず、友達もいませんでした。気楽に遊んだり話したりできる相手がだれもいなかったのです。

次の資料は、学級で「たまごのロールプレイング」をしたときの、Ａ君の感想です。

動けない、しゃべれないという状態のたまごに対して、何度も繰り返して、
「気持ち悪い、何でここにあるんだ。」
「近寄らないようにしよう。」
「割ってやろうかな。」
などと、冷たいことばを浴びせ、最後の子が、
「あったかい、つるつるしてる。」
「かわいい。何が生まれるのかな。」
と、暖かなことばをかけます。

ぼくは三年ぐらいからこういうつめたいことばやイジメられていました。あたたかいことばはあまりきいたことがありません。何回もあやまってもきいてくれず何回もやる人がいました。

（中略）養護教育センターの先生の指導・助言をもとにしたことや学校の先生方に相談したり協力していただいたことが、職員全体でＡ君の行動を理解したり、見方を変えることにつながったような気がします。見方を変えることで、Ａ君のさびしさやがんばる姿に気づくことができ、共感的に受けとめることもできるようになってきました。（中略）
一番大変だったのは、学級の子供たちや同級生のＡ君に対する見方を変えることでした。「LDである」とは言えませんでしたから、不器用さや乱暴な行為については、「幼いところがあるから、面倒を見てあげるようにしよう。」という言い方で理解させるようにしました。Ａ君のよいところを見つけては、みんなの前でほめるように心がけ、学級の子供たちが少しでも多面的な見方ができるように、私も意識して価値観を広げるようにしました。そして、「いじめ」は絶対許さないという姿勢で学級の子供たちと向き合っていきました。
時間はかかりましたが、指導開始から１年を過ぎようとする頃から、Ａ君の孤立は目立たなくなっています。相変わらず無邪気ないたずらを繰り返し、友達から批判を受けることもありますが、行動がのびのびとしてきて、学級担任や他の子供たちにも気後れせずに接することができるようになっています。いやなことは「いや」と言い、必要なことは自分の意思をはっきりと表現できるようになり、自然な形で他の子供たちと学校生活を送れるようになっています。（後略）

おわりに

学習障害の定義を含め、学習障害児等の指導の在り方については、文部省の調査研究協力者会議で継続して検討が行われているところであり、すべてが明らかになっている段階ではありません。しかし、こうした子供を正しく理解することは、学習障害児等に対する対応の改善につながるばかりではなく、今日的な課題となっている個に応じた指導の充実のためにも意義深いことです。
これまで、学習障害の特徴と指導上の配慮事項、指導事例を述べてきましたが、一人一人の学習障害児等の示す学習上のつまずきや困難の状況は様々です。したがって、その対応の方法については、ある決まった一つの指導法があるというわけではありません。個々の子供の学習上のつまずきや困難の状況を具体的に把握し、指導の手だてを探っていくことが大切です。指導に当たっては、学習障害かどうかをはっきりさせるということよりも、むしろ、まず一人一人の子供を見つめる、あるいは、そこから指導の在り方を探るという姿勢が重要だと言えます。